

2000年8月7日制定
2001年9月1日改訂
2002年3月1日改訂
2002年9月1日改訂
2003年4月1日改訂
2006年11月1日改訂

「土壌環境センター技術ニュース」執筆要項

(社)土壌環境センター
技術ニュース編集委員会

1. 原稿の種類

- 1) 原稿には、「投稿原稿」と「最終原稿」の2種類がある。
- 2) 原稿は、全て執筆要項や原稿作成例に従って作成する。
- 3) 「投稿原稿」は査読前に提出する原稿を指し、特に印刷品位を問うものではない。
- 4) 「最終原稿」は査読終了後に提出を求める原稿であり、最終レイアウト等の体裁を整えた原稿を指す。また、最終原稿提出時には、本文のテキストデータ及び図・表・写真の印刷物等を別途提出する。

2. 原稿のレイアウト

- 1) 報文及び事例紹介は、原稿作成例【添付1】に従って作成すること。
- 2) 技術紹介については、原稿作成例【添付2】に従って作成すること。

3. 文章と文体

- 1) 文体は口語常態(である体)、現代かなづかいを用いる。漢字は原則として当用漢字を使用する。ただし、固有名詞や広く用いられている慣用の語はこの限りではない。また、本文中の人名には敬称を付けない。
- 2) 句読点は、カンマ「,」とピリオド「.」を用いる。
- 3) 文中に外国語を挟むことはできるだけ避ける。ただし、生物の学名、適当な訳語がない述語、固有名詞などはこの限りではない。
- 4) 単位系は、原則として国際単位系(SI)とする。

[備考]

数値と単位記号の間はスペース(半角1文字)をとる。例, 36 mg/L。

%や 等の全角文字に対しては、スペースをとらない。

リットルは cgs 単位である。SI 単位の単位記号は dm^3 であるが、単位記号 L, l, l (できれば L) を用いることも可とする。

単位記号 ppm は原則としては用いない。mg/L などを用いる。例外, ガス濃度。

トン(cgs 単位)であるが、用いることも可とする。単位記号は t を用いる。ただし、厳密に数値を扱う場合には、 10^3 kg を用いる。

時間の単位は秒であるが、分、時間、日を用いることも可とする。単位記号はそれぞれ s, min, h, d を用いる。

数学記号は1文字とし、イタリック体で表す。例, $L = D/Pa$

4. 図, 表, 写真

- 1) 図, 表などは整理されたものとし、生のデータのみを多数載せることは避ける。

- 2) 図(特に地形図, 地質図など)の内容の大きさを示す場合には, 何万分の1という表現は避け, 必ずスケールを入れる。
- 3) 表中の数字は小数点の位置を揃える。

5. 参考文献

引用した文献は, 引用順に番号を付け, 以下に示す例に従って一括本文末にまとめて記載する。本文中には引用箇所を上付き文字で^{1), 2)}, ...として記入する。なお, 出典名の表記はできるだけ省略しないことを原則とする。

(例)

参考文献

専門雑誌の引用例

【著者(発行年): タイトル, 雑誌名, 巻, 号, ページ/区分の範囲】

- 1) 中島 誠, 坂本 大, 下村雅則, 根岸昌範 (2000): 透過性浄化壁による汚染地下水の浄化について, 地下水学会誌, Vol. 42, No. 1, pp. 27~45.
- 2) Lu, G., Clement, T. P., Zheng, C., and Wiedemeier T. H. (1999): Natural attenuation of BTEX compounds, model development and field-scale application, Ground Water, Vol. 37, No. 5, pp. 707~717.

単行本の引用例

【著者(発行年): 書名, 出版社(所在地: 外国の場合), ページ/区分の範囲】

- 3) 高桑健 (1962): 選鉱工学 上巻(改新版), 共立出版, pp. 175~266.
- 4) 山本荘毅 (1986): 地下水学用語辞典, 古今書院(東京) 出版社名, p. 141. (全文引用例)
- 5) Cohen, R.M. and Mercer, J. W. (1993): DNAPL site evaluation, C. K. Smoley (Boca Raton), pp. 5-1~5-48. (複数章の引用例)

【編者(発行年): タイトル, 書名, 出版社(所在地: 外国の場合), ページ/区分の範囲】

- 6) 水収支研究グループ編 (1993): 地下水の基本的性格, 地下水資源・環境論 - その理論と実際 -, 共立出版, pp. 71~103.

【著者(発行年): タイトル, 書名(編者), 出版社(所在地: 外国の場合), ページ/区分の範囲】

- 7) 中杉修身 (1995): 有機塩素化合物による地下水汚染対策の推移, 地下水・土壤汚染の現状と対策(日本水環境学会関西支部編), 環境技術研究協会, pp. 1~9.
- 8) Nakashima, M., Sakamoto, D., Imamura, S. and Negishi, M. (2000): Installation of permeable groundwater treatment wall and its remedial effects, In Groundwater Updates (ed., Sato, K. and Iwasa, Y.), Springer-Verlag (New York), pp. 111~116.

【原著者(発行年): 書名, 出版社(所在地: 外国の場合), ページ/区分の範囲】

- 9) クックソン, J. T. (1997): 生物プロセスの適用, バイオレメディエーション エンジニアリング ~設計と応用~, エヌ・ティー・エス, pp. 3~23.

本文中での引用例

中島¹⁾は.....と述べている。Nakashima *et al.*⁷⁾によれば.....とされている^{2), 4)}。

6. その他

- 1) 全ての原稿は A4 サイズで作成する。
- 2) また原稿の 2 ページ以降, 全ての頁の裏面上部端に所属機関と投稿代表者名を鉛筆で記入する。また, 原稿頁順を裏面下部に鉛筆で記入する。